

教員および学生への影響

授業時間が90分から100分になることによる影響は下記のように考えられます。

教員	学生
+10分を有効に使うには どうすれば良いか？	集中力が続かない。

授業を行うためのヒント

ここではすでに100分あるいは105分に移行した他大学の事例^{★1}を参考にして、その留意点を本学に適用すると下記のようになります。

1. 集中力を維持し気分転換できる授業構成にする

◆ 100分だからこそできる授業

100分の授業で実施可能な具体的な手法として、「+10分の活動」と「100分だからこそできる活動」を紹介します。

+10分の活動

+10分でできる代表的な事例は、「小テスト」の実施や学生に記述させるコンパクトな質問用紙である「ミニツツペーパー」の活用です。これらは簡単に授業に取り入れることができます。学生は手を動かしつつ授業やグループワーク等での内容を復習できることから、教育効果の向上が期待できます。教員および学生の双方にとって100分授業の影響をポジティブなものにすることができるでしょう。

また、「大福帳」と言われるカードを利用し、学生が授業のたびに100～200字のコメントを書き入れたカードを教員に提出し、教員がフィードバックを返すことで円滑なコミュニケーションを図る方法や、その回の授業内容に基づいて問題を学生自身に作成させる問題作成、2名の学生がペアになって相互評価を行う「ピア・レビュー」など他にも様々な授業方法があります。こうしたアイデアについてはFD推進センターのWebサイトにある「FDハンドブック」に多数掲載されていますので、参照してみてください。

^{★1} 参考文献：東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構 アクティブラーニング部門、+15 (Plus fifteen minutes.) : How can we enjoy plus 15 minutes? 2014.

100分だからこそできる活動

100分だからこそできる代表的な事例は、**グループ・ディスカッション**や**学生による発表、学生同士の教え合い**です。

後述する授業支援システムにおいては、「**プレゼンテーション相互評価支援システム**」というツールも用意しています。スマートフォンを用いて学生同士がプレゼンを評価し、その結果を簡単に集計・共有できるシステムです。詳細は「**FDハンドブック**」をご参照ください。

学生のモチベーションを維持する手法として有名なARCSモデルでは「**授業に変化をつけていくか**」というチェック項目があります。各回の授業でこうした活動を取り入れ、変化をつけていくのも一つですが、14回の授業の一部にとりいれることで、1セメスターの中で変化を設けたりリズムを変えたりすることも一つの方法です。

2. 授業支援システムや各種ツールを活用する

◆ 授業支援システム授業資料配布機能

資料を学生に配布する場合には、授業支援システムの「**教材**」機能を選択して、学生に配布する教材をPCからアップロードします。また、ある授業時間に複数の資料を配布する場合にはフォルダを作成し、その中に配布する資料をまとめます。自身が担当した他の授業の教材や前年度担当した授業の資料を新規の授業で再利用することもできます。

※資料配布に際し、著作権の取り扱い等にご注意ください。

◆ クリッカー機能

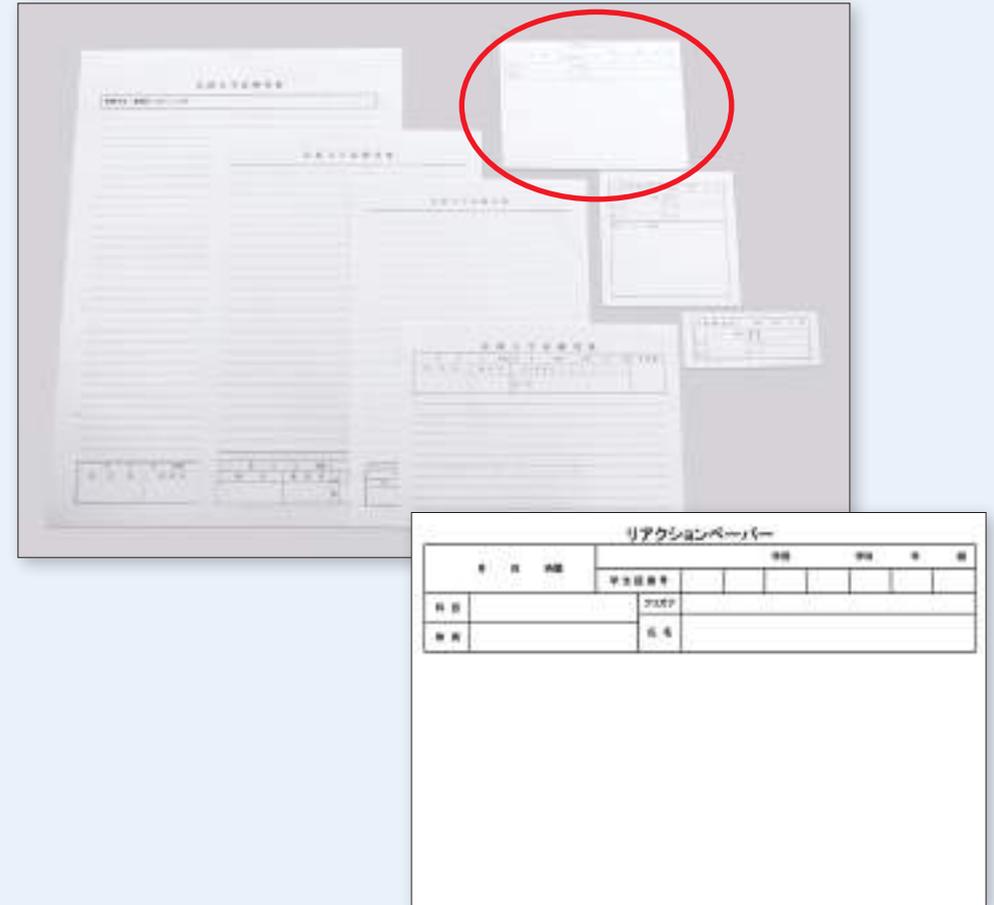
授業にてクリッカーを利用し学生の理解度などを把握します。また、アンケートにも利用できます。授業中に教員は事前に作成した問題内容をスクリーンに提示します。学生は提示された問題を見て0～9のうちから適切な番号をスマートフォン等で入力すると、集計されたグラフ形式の回答結果を即座にスクリーン上に提示することができます。クリッカーを活用することで、学生が自らの理解度を確認できるだけでなく、授業への参加意識を高めることも期待されます。

◆ アクティブラーニングセット

法政大学は長期ビジョン「HOSEI2030」にもとづき「**アクティブラーニングの推進**」を行っています。その一環として、教育開発支援機構では、2017年11月より以下の取り組みを開始しました。ぜひご活用ください。

①リアクションペーパー（A6サイズ）

試験用紙・出席調査票など一連の法政大学用紙（A3, B4, A4, B5, A5など）に加え、新たにリアクションペーパーとしてA6サイズの用紙を教授室・講師室に設置しました。



② アクティブラーニングセット

KJ法^{★2}などに活用できる付箋（75mm×75mm）、黒・赤ペンを1セットとしたアクティブラーニングセットを教授室・講師室に設置しました。また、発表用サイズの模造紙も設置しました。

※ともに通常授業での使用に限る。数に限りがあります。



【注意】上記取り組みは、当該年度の予算状況により、年度途中の停止・廃止する場合があります。

その他、授業において活用いただけるツールや手法は、FD推進センターのWebサイトにある「FDハンドブック」にて紹介しています。興味のある方はご参照ください。

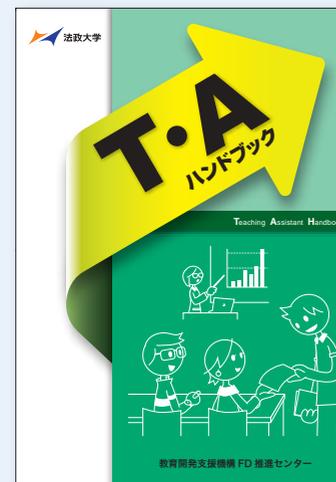
★2 KJ法：川喜田二郎 東京工業大学名誉教授がデータをまとめるために考案した手法

3. ティーチング・アシスタント (T・A) を活用する

本学には、大学院生に授業や教育活動をサポートしてもらうT・A制度が設けられています。教材作成の補助、資料配布、機材の準備、学部生へのチュータリング（助言）のほか、出席管理や小テストの採点（定期試験を除く）など、授業時間内外の様々な補助業務を担ってもらうことができます。ただし、成績評価や授業に関係のない教員個人の秘書的業務を任せることはできません。また、T・Aが勤務可能な授業時間は週5回（大学院授業は週6回）までとなっています。

FD推進センターでは、下記のように「T・Aハンドブック」の配布および動画配信を行っています。T・A制度を利用する際は各学部にお問い合わせください。

T・Aハンドブック

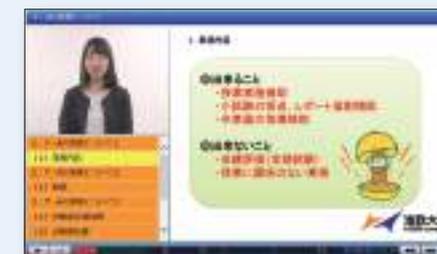


動画配信

1. T・Aの制度および心得・注意事項について



2. T・Aの業務について



3. 座談会「私のT・A体験」

